

学 位 論 文 〈要約〉

国語科クリティカル・リーディングの研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期

学習開発専攻 カリキュラム開発分野

澤口哲弥

2018

国語科クリティカル・リーディングの研究

学位論文〈要約〉目次

論文構成	1
研究の目的と方法	4
1. 研究の動機	4
2. 研究の目的	10
3. 研究の方法	10
3. 1. 理論構築の方法と指導理論の措定	10
3. 2. 各章の研究の方法	11
3. 2. 1. 目的①のための方法 (第1章)	11
3. 2. 2. 目的②のための方法 (第2章)	11
3. 2. 3. 目的③のための方法 (第3章)	12
3. 2. 4. 目的④のための方法 (第4章, 第5章, 第6章)	12
3. 2. 5. 目的⑤のための方法 (第7章)	13
研究の成果と課題・展望	15
1. 国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の整理 (目的①)	15
2. 内外の先行研究による国語科 CR の理論的な土台の構成 (目的②)	16
3. 国語科 CR の指導理論の構成 (目的③)	16
4. 国語科 CR の指導理論の実践の場での検証 (目的④)	21
5. 新しい教育状況における国語科 CR の可能性と展望 (目的⑤)	25
6. 研究の課題	26
7. 今後の展望	27
参考引用文献	28

論文構成

序章 研究の動機・目的・方法

1. 研究の動機
2. 研究の目的
3. 研究の方法
 3. 1. 理論構築の方法と指導理論の措定
 3. 2. 各章の概要
 3. 2. 1. 目的①のための方法 (第1章)
 3. 2. 2. 目的②のための方法 (第2章)
 3. 2. 3. 目的③のための方法 (第3章)
 3. 2. 4. 目的④のための方法 (第4章、第5章、第6章)
 3. 2. 5. 目的⑤のための方法 (第7章)

第1章 国語科における「クリティカルな読み」の理論と実践

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 先行研究の検討
 3. 1. 言語論理教育
 3. 2. 評価読み
 3. 3. メディア・リテラシー教育
 3. 4. PISA型「読解力」における熟考・評価
 3. 5. 批判的思考
4. 5つの指導の系列のまとめ
5. 国語科における「クリティカルな読み」の指導理論の分布マトリクス
6. 第1章のまとめ

第2章 C.Wallace の Critical Reading 理論

1. Critical の概念
2. なぜ Wallace なのか
3. C.Wallace の目標論
 3. 1. 社会的・文化的コンテクストに着目した読みを目指す
 3. 2. 批判的言語意識を育む
 3. 3. 批判的教育学の理念を Critical Reading に活かす
 3. 4. 複眼的な視点から読むことを目指す

4. Wallace の教材論
 4. 1. コミュニティ・テキストの活用
5. Wallace の授業論
 5. 1. ハリデーの理論をふまえた授業方略
 5. 2. ハーバーマスの理論をふまえた授業方略
 5. 3. シラバスとタスク方略
 5. 3. 1. シラバス
 5. 3. 2. タスク方略
 5. 3. 3. 授業者の役割
6. インタビュー調査による理論の整理
 6. 1. Wallace の文献整理で明らかになったこと
 6. 2. インタビューの目的
 6. 3. インタビューの概要
 6. 4. 文献とインタビューから見た Wallace の Critical Reading 理論
 6. 4. 1. Critical Reading の研究動機と経緯、背景理論
 6. 4. 2. Critical Reading と文字テキストの関係性
 6. 4. 3. Critical Reading と他の指導理論との関係性
 6. 4. 4. Critical Reading とタスクとの関連性
 6. 5. 成果と課題、及び示唆
7. Wallace の理論と国語科教育
8. 第2章のまとめ

第3章 国語科 CR の指導理論

1. はじめに
2. 国語科 CR の目標論
 2. 1. Wallace の「5つの問い」のフレームワーク
 2. 2. 新しい学習指導要領の方向性
 2. 3. PISA の「読解力」の概念
 2. 4. 国語科 CR の目標の措定
3. 国語科 CR のカリキュラム論
 3. 1. 国語科 CR の指導理論における読解プロセスとフレームワーク
 3. 2. 国語科 CR の指導における段階性
 3. 3. 国語科 CR のカリキュラムの措定
 3. 3. 1. 国語科 CR の読解プロセス
 3. 3. 2. 国語科 CR のフレームワーク
4. 国語科 CR の教材論・授業論の方向性

- 4. 1. 国語科 CR の教材論の方向性
- 4. 2. 国語科 CR の授業論の方向性
- 5. 第3章のまとめ

第4章 国語科 CR の観点による教科書教材の検討(小学校)

- 1. はじめに
- 2. 研究の方法
- 3. 東京書籍版「読み比べ」教材
 - 3. 1. 教材の配列と目標の設定、及び学習指導要領との関係性
- 4. 教材・手引きの検討の方法
- 5. 各教材と手引きの分析
 - 5. 1. 「ふろしきは、どんな めの」(2年・上)
 - 5. 2. 「『ほけんだより』を読みくらべよう」(3年・上)
 - 5. 3. 「広告と説明書を読みくらべよう」(4年・上)
 - 5. 4. 「新聞記事を読み比べよう」(5年)
 - 5. 5. 「新聞の投書を読み比べよう」(6年)
- 6. 分析のまとめ
- 7. 教材及び手引きの改編
 - 7. 1. 改編の方向性
 - 7. 2. 新学習指導要領との関連性
- 8. 各学年の教材及び手引きの改編
 - 8. 1. 第2学年「ふろしきは、どんな めの」
 - 8. 1. 1. A案(手引き)
 - 8. 1. 2. B案(教材/手引き)
 - 8. 1. 2. 1. 教材
 - 8. 1. 2. 2. 手引き
 - 8. 2. 第3学年「『ほけんだより』を読みくらべよう」
 - 8. 2. 1. A案(手引き)
 - 8. 2. 2. B案(教材/手引き)
 - 8. 2. 2. 1. 教材
 - 8. 2. 2. 2. 手引き
 - 8. 3. 第4学年「広告と説明書を読みくらべよう」
 - 8. 3. 1. A案(手引き)
 - 8. 3. 2. B案(教材/手引き)
 - 8. 3. 2. 1. 教材
 - 8. 3. 2. 2. 手引き

- 8. 4. 第5学年「新聞記事を読み比べよう」
 - 8. 4. 1. A案（手引き）
 - 8. 4. 2. B案（教材／手引き）
 - 8. 4. 2. 1. 教材
 - 8. 4. 2. 2. 手引き
- 8. 5. 第6学年「新聞の投書を読み比べよう」
 - 8. 5. 1. A案（手引き）
 - 8. 5. 2. B案（教材／手引き）
 - 8. 5. 2. 1. 教材
 - 8. 5. 2. 2. 手引き
- 9. 教材及び手引きの改編案（一次案）の修正
- 10. 改編教材、手引きの検証
 - 10. 1. 調査の方法と分析
 - 10. 2. 調査結果と考察
 - 10. 2. 1. 第2学年教材「ふろしきは、どんな ぬの」
 - 10. 2. 1. 1. 改編した手引き
 - 10. 2. 1. 2. 解答の傾向と分析
 - 10. 2. 1. 2. 1. A案について（第2学年）
 - 10. 2. 1. 2. 2. B案について（第2学年）
 - 10. 2. 1. 3. 担当教諭のコメント
 - 10. 2. 1. 4. 改編案修正の方向性
 - 10. 2. 2. 第3学年「『ほけんだより』を読みくらべよう」
 - 10. 2. 2. 1. 改編した手引き
 - 10. 2. 2. 2. 解答の傾向と分析
 - 10. 2. 2. 3. 担当教諭のコメント
 - 10. 2. 2. 4. 改編案修正の方向性
 - 10. 2. 3. 第4学年「広告と説明書を読みくらべよう」
 - 10. 2. 3. 1. 改編した手引き
 - 10. 2. 3. 2. 解答の傾向と分析
 - 10. 2. 3. 3. 担当教諭のコメント
 - 10. 2. 3. 4. 改編案修正の方向性
 - 10. 2. 4. 第5学年「新聞記事を読み比べよう」
 - 10. 2. 4. 1. 改編した手引き
 - 10. 2. 4. 2. 解答の傾向と分析
 - 10. 2. 4. 3. 担当教諭のコメント
 - 10. 2. 4. 4. 改編案修正の方向性

- 1 0 . 2 . 5 . 第 6 学 年 「新 聞 の 投 書 を 読 み 比 べ よ う」
 - 1 0 . 2 . 5 . 1 . 改 編 し た 手 引 き
 - 1 0 . 2 . 5 . 2 . 解 答 の 傾 向 と 分 析
 - 1 0 . 2 . 5 . 2 . 1 . A 案 に つ い て (第 6 学 年)
 - 1 0 . 2 . 5 . 2 . 2 . B 案 に つ い て (第 6 学 年)
 - 1 0 . 2 . 5 . 3 . 担 当 教 諭 の コ メ ン ト
 - 1 0 . 2 . 5 . 4 . 改 編 案 修 正 の 方 向 性 (第 6 学 年)
- 1 0 . 3 . 改 編 し た 教 材 ・ 手 引 き の 修 正
 - 1 0 . 3 . 1 . 改 編 し た 手 引 き の 修 正 (第 2 学 年)
 - 1 0 . 3 . 2 . 改 編 し た 手 引 き の 修 正 (第 3 学 年)
 - 1 0 . 3 . 3 . 改 編 し た 手 引 き の 修 正 (第 4 学 年)
 - 1 0 . 3 . 4 . 改 編 し た 手 引 き の 修 正 (第 5 学 年)
 - 1 0 . 3 . 5 . 改 編 し た 手 引 き の 修 正 (第 6 学 年)
- 1 1 . 第 4 章 の ま と め

第 5 章 国 語 科 CR の 観 点 に よ る 教 科 書 教 材 の 検 討 (中 学 校)

- 1 . は じ め に
- 2 . 小 学 校 教 材 の 分 析 結 果
- 3 . 中 学 校 教 材 へ の 連 接
- 4 . 教 材 ・ 手 引 き の 検 討
- 5 . 手 引 き 改 編 の 理 論 構 成
- 6 . 教 材 ・ 手 引 き の 改 編
 - 6 . 1 . 教 材 に つ い て
 - 6 . 2 . 手 引 き に つ い て
 - 6 . 3 . 手 引 き に お け る 問 題 の 所 在
 - 6 . 4 . 手 引 き の 提 案
- 7 . 他 学 年 の 手 引 き 改 編
 - 7 . 1 . 「オオカミを見る目」と「『常識』は変化する」 (第 1 学 年)
 - 7 . 1 . 1 . 手 引 き に つ い て
 - 7 . 1 . 2 . 手 引 き に お け る 問 題 の 所 在
 - 7 . 1 . 3 . 手 引 き の 提 案
 - 7 . 2 . 「鰹節－世界に誇る伝統食」と「白川郷－受け継がれる合掌造り」 (第 2 学 年)
 - 7 . 2 . 1 . 手 引 き に つ い て
 - 7 . 2 . 2 . 手 引 き に お け る 問 題 の 所 在
 - 7 . 2 . 3 . 手 引 き の 提 案
- 8 . 改 編 手 引 き の 検 証

- 8. 1. 調査の方法と分析
- 8. 2. 第1学年改編手引きの調査－中学生対象
- 8. 3. 授業者のコメント
- 8. 4. 調査結果の考察
- 8. 5. 高等学校における調査
 - 8. 5. 1. 学習者の選択した設問の傾向
 - 8. 5. 2. 各設問における解答傾向
 - 8. 5. 3. 解答傾向の考察
 - 8. 5. 4. 授業者のコメント
- 8. 6. 改編手引きの修正の方向性－第1学年教材
- 8. 7. 第3学年改編手引きの調査－高校生対象
 - 8. 7. 1. 調査の方法
 - 8. 7. 2. 調査の結果A（B高校）
 - 8. 7. 3. 調査の結果B（C高校）
 - 8. 7. 4. 解答傾向の考察
 - 8. 7. 5. 授業者のコメント
- 8. 8. 改編手引きの修正の方向性－第3学年教材
- 9. 改編手引きの修正
 - 9. 1. 第1学年教材
 - 9. 2. 第2学年教材
 - 9. 3. 第3学年教材
- 10. 教材文改編への展望
- 11. 第5章のまとめ

第6章 国語科 CR の観点による教科書教材の検討（高等学校）

- 1. はじめに
- 2. 高等学校における学習の手引きの活用度
- 3. 手引きの分析
 - 3. 1. 「読み比べ」教材の継承
 - 3. 2. 高等学校「国語総合」の概況
 - 3. 3. 手引きの分析
 - 3. 3. 1. 分析の方法
 - 3. 3. 2. 分析結果
 - 3. 4. 学習指導要領との関連性と今後の展望
- 4. 手引きの改編1
 - 4. 1. 教材について

- 4. 1. 1. 現行の手引きとその問題点
- 4. 1. 2. 手引きの改編案
- 5. 改編した手引きの検証
 - 5. 1. 各設問に対する反応
 - 5. 2. 設問の考察と改善案
- 6. 手引きの改編2
 - 6. 1. 教材について
 - 6. 1. 1. 現行の手引きとその問題点
 - 6. 1. 2. 手引きの改編案
 - 6. 1. 3. 改編した手引きの修正
- 7. 第6章のまとめ

第7章 新しい教育状況と国語科 CR の可能性

- 1. はじめに
- 2. 新しい教育状況の検討
 - 2. 1. 新学習指導要領にみられる理念
 - 2. 2. 新学習指導要領をめぐる学力観
 - 2. 3. 全国学力テストの成果と課題
 - 2. 3. 1. 全国学力テストB問題が及ぼした影響
 - 2. 3. 2. 全国学力テストB問題の分析
 - 2. 3. 2. 1. 中学校第3学年の問題分析
 - 2. 3. 2. 2. 小学校第6学年の問題分析
 - 2. 3. 2. 3. 全国学力テストB問題の傾向と課題
 - 2. 3. 3. 全国学力テストの改善の方向性と国語科 CR
 - 2. 3. 3. 1. 実社会に関わりのある題材を用いた問題
 - 2. 3. 3. 2. 文学的文章を用いた問題
 - 2. 3. 3. 3. 古典的題材を用いた問題
 - 2. 4. 答申に見られる高等学校国語科の新たな方向性
 - 2. 5. 大学入学共通テストに見られる新しい学力観
 - 2. 5. 1. 記述式問題のモデル問題例の検討
 - 2. 5. 2. マークシート式問題のモデル問題例の検討
 - 2. 5. 3. 大学入学共通テストのモデル問題例から見た国語科 CR の可能性
 - 2. 6. 国語科に関わる新しい学力測定の動向
 - 2. 6. 1. 民間による新しいテスト開発
 - 2. 6. 1. 1. 語彙・読解力検定
 - 2. 6. 1. 2. 日本語運用能力テスト

- 2. 6. 1. 3. 言語力検定
- 2. 6. 1. 4. 総合学力調査
- 2. 6. 1. 5. 民間による新しいテスト開発から見た国語科 CR の可能性
- 2. 6. 2. 民間による新しい問題集開発
 - 2. 6. 2. 1. 『論理力ワークノート』
 - 2. 6. 2. 2. 『現代文 NEW アプローチ』
 - 2. 6. 2. 3. 『読む力 中上級』
 - 2. 6. 2. 4. 民間による新しい問題集開発から見た国語科 CR の可能性
- 3. 新しい教育状況における国語科 CR の可能性
- 4. 第7章のまとめ

終章 研究の成果と課題・今後の展望

- 1. 研究の成果
 - 1. 1. 国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の整理（目的①）
 - 1. 2. 内外の先行研究による国語科 CR の理論的な土台の構成（目的②）
 - 1. 3. 国語科 CR の指導理論の構築（目的③）
 - 1. 4. 国語科 CR の指導理論の実践の場での検証（目的④）
 - 1. 5. 新しい教育状況における国語科 CR の可能性と展望（目的⑤）
- 2. 研究の課題
- 3. 今後の展望

参考引用文献

資料

- 1. 第2章 資料—Wallace へのインタビュー記録
- 2. 第5章 資料—教材本文
 - オオカミを見る目／「常識」は変化する／黄金の扇風機／サハラ砂漠の茶会
 - 鯉節—世界に誇る伝統食／白川郷—受け継がれる合掌造り
- 3. 第6章 資料—教材本文
 - 暇と退屈の倫理学／生物多様性とは何か

謝辞

研究の目的と方法

1. 研究の動機

実践の場で長らく筆者は、国語科における「読むこと」とは、テキストという窓を通して社会を読み解くことだと考えてきた。テキストの中に垣間見える時代性や思想を考え、テキストを読み手が意味づけていくことが読む愉しみではないかと捉えてきたのである。そして、その愉しみをより深めていくために結果的にいろんな背景知識（Background knowledge）が必要なのだと考えた。

しかし、身近な国語科教育の場は、経験的にこのような順序で進行するものではなかった。説明的文章であれば、新出語句の意味を覚え、段落構成を理解し、主張を理解し、ノートをきれいにまとめ、それで目的は達成される。学習者自身がテキストを自分の問題として取り込み、自分なりにそのテキストを意味づけ、授業者や学習者との間でことばのキャッチボールをすることは一般的な授業にはなかった。

これらの様相は、まだ「言語活動」ということばも「PISA」ということばも人口に膾炙しない頃の話である。しかし、その後、学習指導要領の改訂（2008年〈平成20年〉）によって言語活動の充実が提起され、PISAの読解力の考え方が取り入れられてからは、このような状況に変化も現れた。クリティカル・リーディングという概念が日本の国語科教育に持ち込まれたのもちょうどその頃である。

筆者はこのクリティカル・リーディングの概念に出会うことで、それまで漠然と感じてきた上記のような疑問を解決する方略を知り、実践を試みるのが可能となった。また、実践的研究の過程で国語科教育が成果として残してきた「批判的な読み」などと称される読みの方略や、クリティカル・シンキングと出会い、その知見を授業に取り入れることもできた。

しかし、漠然とではあるが、そこには自身が希求する国語科の学びに向かうには何か足りないと感じてきた。それは、テキストを読むことが結果的に社会を深く読むことにつながっていないということであった。また、そのことを目指す方略が、曖昧なまま存在していないということであった。

その頃から、ことばを学ぶという国語科としての社会的な学びの可能性を考えるようになった。そして、このテーマに挑むことが、自身の中の研究の主たる目的となった。

このような研究を進める中、それを後押しする社会現象も重なった。21世紀に入って世界を覆い始めたポピュリズム、また日本における若者の貧困の問題やブラック企業の実態など、ことばにいつも簡単に感化されていく大衆現象である。これらの現象は、筆者をして、社会に巣立つ学習者を前に「おちおちしてられない」という思いを抱かせしめた。

折しも2016年は公職選挙法の改正によって選挙権年齢が18歳に引き下げられ、若者が

政治に参加する機会が拡大することになった。ますます、目の前の学習者にテキストをクリティカルに読み解く資質を育む必要に迫られてきたのである。

このことの解決には、表層的なテキストの理解だけではなく、ことばの精査、推論からテキストを多角的に読み解き、眼前のテキストを意味づけていくことが重要だと考えた。このためには、従来の国語科教育における「クリティカルな読み」の方略に、社会的実践としての意味合いを加味していく必要がある。論理・論証を学ぶこと、クリティカル・シンキングの知見から読むこと、などの従来の読みの方略だけでは果たせない「何か」を考え、具体的な方策を模索する必要が生じたのである。

このような経緯を経て本研究に至った筆者は、読むことを社会的な実践とするという目標から、題目を「国語科クリティカル・リーディングの研究」と定めた。

本研究はこの指導理論の構築を目指し、これからの社会におけるこれからの国語科教育に対して、一石を投じようとするものである。

2. 研究の目的

以上の課題設定を受け、本研究では次の5つのことを目的とする。

- ①国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の成果と課題を明らかにすること
- ②「①」を解決するための新しい理論を内外の先行研究に求め、読むことを社会的実践とするための理論的な土台を構成すること
- ③「①」「②」をふまえ、国語科クリティカル・リーディングの指導理論をカリキュラムも含め構築すること
- ④「③」での理論を実践の場で検証し、実効性をもった指導理論として調整を図ること
- ⑤新しい教育状況の中で国語科クリティカル・リーディングの可能性を展望すること

3. 研究の方法

3. 1. 理論構築の方法と指導理論の措定

目的を果たすために、本研究では「2.」で示した①から⑤の順に論文を構成する。その際、予想される問題として次のことに留意しながら理論を構築することとする。

一つ目は、先行指導理論との融合を図ることである。国語科クリティカル・リーディング(以下、国語科CR)はこれまでの国語科教育における指導理論の上積みを重ねている。したがって、C.Wallace(第2章で記述、以下Wallace)のクリティカル・リテラシーの知見を背景とした理論を軸としながらも、これまでの先行指導理論と適切な接合を図る必要があると考える。

二つ目は、なぜWallaceの理論を求めたのか、また、海外の先行指導理論を日本の国語科教育に援用することが可能なのかという疑問に明確に答えていくことである。具体的に

は Wallace の Critical Reading 理論が汎用性のあるものであり、日本の教育状況に適用可能なものであることを説明していく必要がある。この疑問に回答することによって初めてその援用の道が開かれると考える。

三つ目は、社会的実践は他教科の課題ではないのかという疑問に答えていくことである。ことばを扱う国語科ならではのクリティカル・リーディングであることを丁寧に論じていくことが、理論と国語科教育を有機的に結びつけていくことにつながると考える。

四つ目は、新学習指導要領（2017年度告示）等に見られる新しい教育状況だけでなく、現場の実態をふまえた指導理論を構築することである。学校教育への導入を前提とした研究としている以上、このことに留意した理論構築を推し進める必要があると考える。

以上のことに留意し、国語科 CR が、国語科として今まで十分に着目しきれなかった社会的な実践へ学びを拡張するものであり、そのような実践を経た学習者が社会のテキストを多角的に読み解き、そこに参画していく資質を獲得することを希求する指導理論であると措定する。

3. 2. 各章の研究の方法

3. 2. 1. 目的①のための方法（第1章）

第1章では、国語科 CR に指導理論構築に向かうための礎を確かめるべく、国語科教育における「クリティカルな読み」の先行指導理論を調査し、その成果と課題を明らかにする。

ここでの「クリティカルな読み」とは「批判読み」「批判的読み」「評価読み」「クリティカル・リーディング」など、戦後の国語科教育におけるテキストをクリティカルに読む学習理論を包括した本研究における呼称である。本研究では、今日的な学習状況との関連性を考察する目的から OECD が PISA に着手した 1997 年を一つの転換点と捉え、調査の範囲についてはその前後以降のものに的を絞る。

先行指導理論の考察に当たっては、指導理論を井上（2007）などの「言語論理教育」、森田（2011）などの「評価読み」、鈴木（1997）などの「メディア・リテラシー教育」、有元（2008）などの「PISA 型『読解力』における熟考・評価」、そして道田（2015）などの「批判的思考」の 5 類型に分け、それらの成果と課題を検証する。

また具体的な考察方法としては、読むことを社会的実践とする観点からの考察をふまえ、「社会的か」「個人的か」、「言語」か「非言語」かの軸でマトリクスを作り、そこに各先行指導理論を布置することで、解決すべき課題を可視化することに努める。

3. 2. 2. 目的②のための方法（第2章）

第2章では、第1章で示唆された国語科教育における「クリティカルな読み」の先行指導理論の課題の解決の道筋を示し、国語科 CR の指導理論構築のための理論となる先行指導

理論を整理する。

具体的には、ロンドン大学において **Critical Reading** の研究を進めてきた **Wallace** の指導理論に着目し、氏の英文による論文の調査を行い、最終的にその理論の国語科教育への援用の可能性を見出すことを目指す。

Wallace に着目したのは、氏の理論がことばの分析を社会的な問題意識をもとに行うものであること、テキストの背景にある社会的な要素を読もうとする理論であること、また多様な学習者の見方・考え方を読むことに活かすという対話による社会参画を目指す理論であることにある。

具体的な方法としては、まず始めに **Wallace** の **Critical Reading** 理論に関する文献 (**Wallace**1998,1992a,1992b,1999,2001,2003,2012 等) を調査し、その指導理論の枠組みを明らかにするとともに、カリキュラムなどの具体的な指導理論について整理し、国語科教育への援用可能性を模索する。そしてそのことを補完し、論文では明らかにならないであろう理論の内実や国語科教育への援用の可能性を探るために、直接 **Wallace** 本人にインタビュー調査を実施する。

これらの総合的な **Wallace** 研究によって、国語科教育の先行指導理論を補い、国語科 **CR** の指導理論の理論的背景を形成することを目指す。

3. 2. 3. 目的③のための方法 (第3章)

第3章では、第2章で明らかになった **Wallace** の **Critical reading** 理論とその国語科教育への援用可能性をもとに、2017年に改訂される新学習指導要領等、新しい教育状況とそれらが国語科に与える影響をふまえながら、今後必要となる学びの要素を措定し、国語科 **CR** の指導理論を構築する。

具体的な指導理論は、OECDのコンピテンシー、PISA、新学習指導要領等の方向性をふまえた読解プロセス、および **Wallace** が指導理論で示したクリティカル・リテラシーを軸とした読みのフレームワークを両輪に据えつつそれらを統合し、「国語科 **CR** の読解プロセスとフレームワーク」として概念化する。

また、その概念を小学校から高等学校まで段階を踏んだ指導理論として示し、具体的なカリキュラムとして12年間を連続したものとして考える「6つのステージ」によるカリキュラムを構築する。

3. 2. 4. 目的④のための方法 (第4章、第5章、第6章)

第4章から第6章までは、第3章で構築した国語科 **CR** の指導理論を実践の場に適用させる第一歩として、既存の国語科の教科書教材を国語科 **CR** の観点から分析し、それらの教材や学習の手引きを改編する。そのことによって、現行の指導要領 (2008, 2009 年告示) のもとに作成された国語科教材の成果と課題を明らかにするとともに、国語科 **CR** の指導理論がどのようにそこに改良を加えていけるのかを考え、提案していく。

具体的には、小学校、中学校、高等学校のすべての校種の教科書を検討の対象とし、説明文、説明的文章、評論、社会的テキストとしてのマルチテキストに該当する教材、および学習の手引きを分析し、その改編を試みる。

分析の観点、国語科 CR の読解プロセス、および国語科 CR のフレームワークの二つの観点から行い、可能な限りデータとして可視化し、問題の在りかがわかりやすいように努める。

分析と考察、また具体的に改編した教材は小学校、中学校、高等学校それぞれに学校現場での検証を依頼し、学習者や授業者が改編した教材をどのように捉えているか、また現段階でどの程度それに対応しうるかを観察するとともに、その調査から見える課題や今後の可能性を拾い上げ、改編案を修正する。

国語科 CR の指導理論に基づいた新しい教材づくりは今後の課題として温存しつつ、まずは、これらの章において、既存の素材を使いながら、学習課題の改編でどこまで国語科 CR が実効性をもたらすことが可能なのかを探り、今後の教材づくりの礎とすることを旨とする。

3. 2. 5. 目的⑤のための方法（第7章）

第7章では、新学習指導要領が公示されるなどの新しい教育状況の中にあって、学力観がどのように変化しているのか、また今後どのような学力の育成が国語科教育に求められるのかを分析し、国語科 CR の指導理論がそこに寄与する可能性について考察する。

新しい教育状況としては、新学習指導要領やその背景にあると考えられる OECD の学力観を視野に入れながら、分析の方略としてそれらの資質・能力を測るテストなどの動向に着目し、その実態を整理する。

具体的には、2007年度から実施されている全国学力テスト（B問題）、また新学習指導要領の理念を具現化したと思われる2017年に公開された大学入学共通テストのモデル問題について国語科 CR の指導理論の観点から分析をし、その成果と課題を明らかにする。

次に、上記のような官製テストのほかに、新しい教育状況をめぐって開発されている民間のテストにも着目し、該当すると思われるテストを同様の方法で分析する。また、育成の観点から発刊される民間の問題集についても調査し、同様の方法で分析する。

これらの分析から、新しい教育状況において求められようとしている資質・能力は何かを実際のテスト問題から機能的に推論し、国語科 CR が目指そうとしている読むことを社会的実践とする理論との関連性を考察する。

加えて本章では、これらの分析、考察を再び授業実践の場に返し、国語科 CR が既存の国語科での学びを活かしながら、そこにどのように修正、追加をしていくことができるのかを考える。

例えば、新しい教育状況においては図や表を含めたマルチテキストなどを読む素材とする提案が見られるが、そのような形式の変更が図られなければ、新学習指導要領における国語科の理念は実現し得ないのかという問題については一考を要すると考える。具体的に

は、全国学力テストの B 問題で見られるようなポスターやチラシ、学級での話合いの記録などのテキスト、また大学入学共通テストのモデル問題で見られるような契約書や会話形式のテキストである。

そのためにはテキスト、特に文字テキスト（文章）というこれまで国語科が中心的な素材としてきた形式を堅持しながらも、新しい学力観が求める教材観や授業観を達成しうることの可能性を論じ、検証しなければならないだろう。このことも国語科 CR の指導理論の構築が果たすべき役割であると考えている。

OECD の提起する学力観も含めて、教科横断や教科融合が今日的な潮流であるということは十分理解しつつ、ことばを読むことで学びを深めること、クリティカルな読みができることの可能性をこの章では論じるとともに、新しい教育状況に中であって、今後の国語科教育の教材、授業はどのようにあるべきなのかについて展望する。

研究の成果と課題・展望

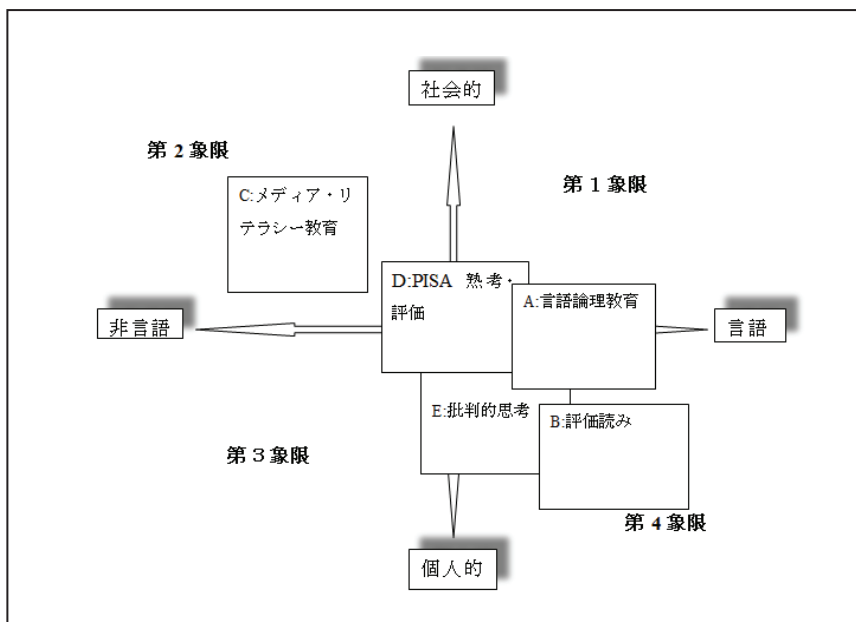
「2. 研究の目的」で述べた5つの目的について、本研究によって得られた成果と課題、および今後の展望を以下に整理する。

1. 国語科教育における「クリティカルな読み」の先行研究の整理（目的①）

第1章では、OECDがPISAに着手した1997年前後以降の文献に的を絞り、近年の国語科における「クリティカルな読み」の先行指導理論を調査、整理し、その成果と課題を明らかにした。具体的な方法としては、国語科における「クリティカルな読み」の指導理論を「言語論理教育」「評価読み」「メディア・リテラシー教育」「PISA型『読解力』における熟考・評価」「批判的思考」の5つの類型に分け、それらの先行研究を整理することからその傾向を見出し、5つの指導理論をマトリクスに布置した。

その結果、ことばに着目することを中心としながら読むことを社会的なこととして扱う「言語×社会的」の象限に研究・実践の空白が見られることが示唆された【図1】。そして、読むことを社会的実践とするには既存の「クリティカルな読み」の指導理論に加えて、さらにことばに着目しながら読むことを社会的な実践に拡張していく理論が必要であることがわかった。

【図1】国語科における「クリティカルな読み」の指導理論の分布マトリクス（枠内の名称は代表的な理論、領域）



2. 内外の先行研究による国語科 CR の理論的な土台の構成（目的②）

第2章では、第1章で見出された問題の解決として、Wallace の Critical Reading 理論に着目し、以後の国語科 CR の礎となる理論としての可能性を探った。

Wallace の研究については、文献調査のほかにインタビュー調査も実施し、問題意識、これまでの研究の経緯、目指す研究の方向性、また日本の国語科教育への援用の可能性等について総合的にその知見を獲得することを試みた。

その結果、Wallace の Critical Reading 理論は、目標論としてテキストを社会的な産物として読む理論であることがわかった。フェアクロフ、フレイレ、ハリデー、ハーバーマスなどの研究を背景理論とした読むことを社会的実践とするその理論は、第1章で明らかになった「言語×社会的」の空白の問題を解決する理論として期待できるものである。

教材論では、コミュニティ・テキスト（CMT）を導入しながらも、Wallace はあくまで印刷された文字テキストから社会を読み解くという方略を大切にしていた。このような教材観は、文字を読んで考えるという日本の国語科の教材観と通底し、国語科教育への援用の可能性を確信できた。

また授業論では、ハーバーマスのコミュニケーション論を背景理論とし、国語科教育における言語活動や、新学習指導要領で提起された「主体的・対話的で深い学び」を実践するための参考となる理論であることがわかった。

国語科に援用可能な理論、具体的な方略はいくつか見出すことができた。その中で例えば次の「5つの問い」【表1】は、指導理論を構成する上での一つの軸として注目できた。

【表1】Wallace の「5つの問い」

①Why is this topic being written about?

*（このテキストのトピックについて）なぜ書かれているか。

②How is this topic being written about?

*（このテキストはトピックについて）どのように書かれているか。

③What other way of writing about the topic are there?

*（このテキストのトピックについて）他の書き方はないか。

④who is the text's model reader?

*このテキストの想定する読者はどのような人か。

⑤What is the topic?

*トピックは何か。

3. 国語科 CR の指導理論の構築（目的③）

第3章では、Wallace の Critical Reading の理論に加え、新学習指導要領の方向性や OECD の読解方略の理論を参考とし、より実効性のある今日の国語科教育の状況に見合った国語科 CR の指導理論の構築を目指しカリキュラムとしてまとめた。

国語科 CR の指導理論には二つの軸を設定した。一つは読解のプロセスであり、もう一つはフレームワークである。

読解プロセスは、PISA の「読解力」の概念などを参考に「理解する」「推論する」「評価する」の三つの領域で構成した。この読解プロセスでは特に「推論する」ことを重視した。

【表 2】 国語科 CR の読解プロセス

| | |
|------|------------------------------------|
| 理解する | テキストの複数の情報を統合し、内容を正確に理解する。 |
| 推論する | テキスト内外の情報を関連づけて推論する。 |
| 評価する | テキストを社会的・文化的文脈に関連付けて評価し、再定義・再構成する。 |

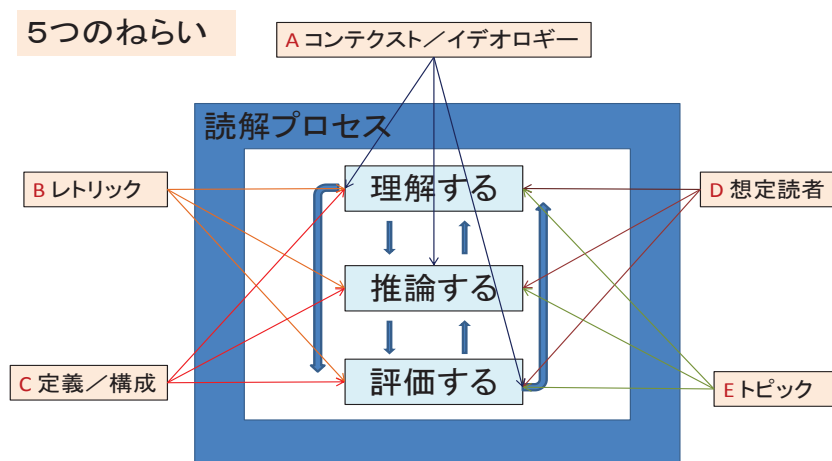
フレームワークは Wallace の理論にあった「5つの問い」を「5つのねらい」として構成し、その観点からテキストを分析した。テキストの生成過程としてのコンテキストや背景にあるイデオロギーに着目する「コンテキスト／イデオロギー」、テキストがどのように読み手を感化しているかそのレトリックに着目する「レトリック」、複数の視点からテキストを読み直す場合それをどのように再定義、再構成することができるかに着目する「定義／構成」、テキストの出所と想定された読者を考える「想定読者」、そしてテキストが示す問題の構造を考える「トピック」の5つである【表 3】。

【表 3】 国語科 CR の「5つのねらい」

| 記号 | 国語科 CR の「5つのねらい」 | キー・コンセプト |
|----|------------------------------|---------------|
| | Wallace の「5つの問い」 | |
| A | テキストの書かれた背景、問題意識を考える。 | コンテキスト／イデオロギー |
| | (このトピックについて) なぜ書かれたのか。 | |
| B | テキストのレトリックを分析し目的・効果を考える。 | レトリック |
| | (このトピックについて) どのように書かれたか。 | |
| C | 複数の視点からテキストの定義・構成を考える。 | 定義・構成 |
| | (このトピックについて) どのような他の書き方があるか。 | |
| D | テキストの出所と想定(想定外)読者を考える。 | 想定読者 |
| | 誰が誰に対して書いているか。 | |
| E | テキストのトピックに見られる問題の構造を考える。 | トピック |
| | トピックは何か。 | |

国語科 CR の指導理論では、これらの二つを「国語科 CR における読解プロセスとフレームワーク」としてまとめた【図 2】。

【図 2】 国語科 CR における読解プロセスとフレームワーク



一方、学校での段階的な取り組みのことを考え、K-12 などの内外のカリキュラム論を参考としながら、小学校から高等学校までを以下の 6 つのステージに分けたカリキュラムを規定した。カリキュラムは、先の「読解プロセス」「フレームワーク」ごとにまとめた（【表 4】【表 5】）。

《6 つのステージ》

【第 1 ステージ (St.1)】 小学校第 1 学年～第 2 学年

【第 2 ステージ (St.2)】 小学校第 3 学年～第 4 学年

【第 3 ステージ (St.3)】 小学校第 5 学年～第 6 学年

【第 4 ステージ (St.4)】 中学校第 1 学年～第 2 学年

【第 5 ステージ (St.5)】 中学校第 3 学年～高等学校第 1 学年

【第 6 ステージ (St.6)】 高等学校 2 学年～高等学校第 3 学年

【表 4】 国語科 CR のカリキュラム①（読解プロセス）

| | 理解する | 推論する | 評価する |
|------|-------------------------------------|---|--------------------------------------|
| St.1 | 書かれていることを知ろうとし、分かったことをことばにすることができる。 | テキスト内の情報、自分の知識・経験を根拠として、書かれていることのわけに興味を持ち、ことばにすることができる。 | 内容や書かれ方について関心を持ち、自分のことばで感想を言うことができる。 |

| | | | |
|------|--|--|--|
| St.2 | 書かれていることを部分部分で理解し、書かれ方の工夫に気づき、説明することができる。 | テキスト内の情報、自分の知識・経験を根拠として、テキストには書かれていないことについて考え、その理由を説明することができる。 | 内容、書かれ方について、自分の経験や知識をふまえて意見を言うことができる。 |
| St.3 | 書かれていることを全体で理解し、内容をまとめることができる。また書かれ方の工夫を類型化し、そのねらいを説明することができる。 | テキスト内の複数の情報、自分の知識・経験を根拠として、テキストには書かれていないことについて考え、その理由を説明することができる。 | 書かれている内容、書かれ方について、自分の経験や知識、他の情報をふまえて、複数の観点から関連づけ意見を言うことができる。 |
| St.4 | テキストの主旨を、情報を統合させ、まとめることができる。また、構成やレトリックの戦略に気づき、そのねらいを説明することができる。 | テキストの内容・表現に着目して、書かれた理由、目的、想定読者などを考えるとともに、テキストの背景について考え、それらを説明することができる。 | テキストの内容・表現に着目し、それら相互の関連性の分析から、その目的や効果について評価することができる。また、他のテキストにあてはめて考えることができる。 |
| St.5 | テキストの主旨を、情報の統合によって、要約したり別テキストとしてまとめ直したりすることができる。また、構成やレトリック等の表現戦略を指摘し、説明することができる。 | テキストの内容と表現戦略との関係性を考え、そこからテキストの背景にある意味や意図、戦略を考えることができる。また、それらの関係性を説明することができる。 | テキストの内容や形式に着目し、それらを評価したり、他のことにあてはめたりして、テキストの意味について深く考えることができる。 |
| St.6 | テキストの主旨、テーマ、構成、構造を総合的に把握し、あらゆる表現でそれらをまとめ直すことができる。また、構成やレトリック等の表現戦略を指摘し、書き手の意図との関係性を説明することができる。 | テキストの内容と表現戦略との関係性を考え、そこからテキストの背景にある意味や意図、戦略を考えることができる。また、それらの関係性を社会や文化に関連付けて考察し説明することができる。 | テキストの内容や形式に着目し、それらを評価したり、現実の問題にあてはめたりして、テキストの意味・価値について深く考えることができる。また、社会的・文化的な観点からその再定義・再構成を図ることができる。 |

【表 5】国語科 CR のカリキュラム②（フレームワーク）

| | A
コンテキスト／
イデオロギー | B
レトリック | C
定義／構成 | D
想定読者 | E
トピック |
|------|--------------------------------------|--|--|--|--|
| St.1 | テキストが書かれた理由に興味を持つことができる。 | テキストの表現の工夫に興味を持つことができる。 | テキストで扱われていることからの意味を理解しようとすることができる。 | 誰がどんな人にしたテキストなのかを想像することができる。 | 何について書かれたテキストなのかに気づくことができる。 |
| St.2 | テキストが書かれた理由を考えることができる。 | テキストの表現の工夫を指摘し、その理由を考えることができる。 | テキストで扱われていることからの意味を理解するとともに、その意味を別の視点から捉えることができる。 | 誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、理由づけることができる。 | なぜ、何について書かれたテキストなのかを考えることができる。 |
| St.3 | テキストが書かれた由来、背景を考えることができる。 | テキストの表現の工夫とそのねらいについて指摘し、筆者の意図を考えることができる。 | テキストで扱われていることからの意味を理解するとともに、その意味を別の視点から捉え直すことができる。 | 誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、その理由を複数の観点から考察することができる。 | なぜ、何について書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマを指摘することができる。 |
| St.4 | テキストが書かれた由来、背景、および筆者の問題意識を考えることができる。 | テキストの表現の工夫と目的を分析し、それらの関係と妥当性について考えることができる、 | テキストで扱われることがらどどのように定義づけられているかを考え、別の定義づけをすることができる。 | 誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、その社会的・文化的な関係性を想像することができる。 | なぜ、何について書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマを正確に指摘することができる。 |
| St.5 | テキストが書かれた由来、社会的・文化的背景、および筆者の問題意識 | テキストの表現の工夫と目的の戦略としての関係性を分析し、 | テキストで扱われることがらどどのように定義づけられている | 誰がどんな人になぜ書いたテキストなのかを考え、社会的・文 | なぜ、何について書かれたテキストなのかを考え、中心となる |

| | | | | | |
|------|--|--|--|--|--|
| | 題意識を多角的に捉えて考えることができる。 | 評価することができる。 | かを考え、別の定義づけを具体的にすることができる。 | 化的な関係性を分析することができる。 | テーマ、隠れたテーマを指摘することができる。 |
| St.6 | テキストが書かれた由来、社会的・文化的背景、および筆者の問題意識を多角的に捉えて、コンテキスト、イデオロギーを分析することができる。 | テキストにおけるレトリックの目的・効果分析をし、筆者や読者、社会的・文化的背景との関係性を考察することができる。 | テキストで扱われることがらどのように定義づけられているかを考え、社会的・文化的な観点から別の定義を見出して再定義し、テキストの再構成をすることができる。 | 筆者、想定読者、想定外読者を考え、テキストの見えない社会性・文化性とそのねらいについて考察することができる。 | 何についてなぜ書かれたテキストなのかを考え、中心となるテーマ、隠れたテーマを指摘し、テキストの真のねらいを考察することができる。 |

4. 国語科 CR の指導理論の実践の場での検証（目的④）

第4章、第5章、第6章では、国語科 CR の指導理論にもとづいて、教科書教材の改編を試みた。

第4章では小学校の教材を検討し、その改編を試みた。

東京書籍版の「読み比べ」教材を取り上げ、第2学年から第6学年までのすべての教材を、国語科 CR のフレームワークの観点から分析し、国語科 CR の読解プロセスとフレームワークの観点から改編を行った。

分析では、「レトリック」の要素が一定見られ、「想定読者」の要素も一部見られたが、そのほかの「5つのねらい」の要素は見られなかった。

改編にあたっては CR のフレームワークの要素を満たすように努めた。改編案は、手引きのみを改編した A 案と教材にも手を加えた B 案の両方を用意し、それらを小学校に依頼して調査を行った。調査で得た学習者のワークシートと担当教諭のコメントから改編案を再修正し、それを「国語科 CR による教材・学習の手引きの改編—小学校」としてまとめた。

改編案は、慣れないこともあってか、難しいという反応も多々見られたが、授業形式での実践がなされた調査校では教諭の反応も含めて意欲的に取り組む姿勢が報告され、今後の可能性を予感させる結果を得ることができた。

改編した手引きの一例を次に示す【表6】。

【表 6】 改編した手引き（「新聞記事を読み比べよう」第 5 学年）

—A 案・B 案共通—

てびき

新聞記事を読み比べ、書き手の意図が記事にどう表れているかを考えよう。また、身近なメディアについて調べてみよう。

【理解する】

①二つの新聞記事を読み比べ、書き手が何を伝えようとしたのかを考えよう。

〈比べるところ〉

- ・見出し
- ・リード
- ・写真
- ・本文の書き方（書き手の言葉の選びかた）

●A社の記事

●B社の記事

すいろん
【推論する】

②それぞれの記事は、どんな人に読んでもらおうと思って書かれていますか。言葉や表現をもとに考えてみよう。

●A社の記事

●B社の記事

③それぞれの記事を書いた人の考え方や問題だと思っていることを、言葉や表現をもとに考えてみよう。

●A社の記事

●B社の記事

【評価する】

④説明文には、「新聞は、社会の出来事を速く多くの人に知らせるための印刷物」とありますが、A社、B社の記事は「出来事」だけを伝えていると思いますか。出来事のほかに何かを伝えていると思いますか。また、そう思うのはなぜですか。考えをまとめ、話し合ってみよう。

〈分析の方法〉

- ・「出来事」と言える部分に線を引こう
- ・「出来事」とは言えない部分に線を引こう

⑤それぞれの記事にかくされた情報がないかを考えてみよう。

* 「かくされた情報」……書き手があえて記事にのせなかったこと

●A社の記事

●B社の記事

《発展》

身近なメディアの文章を持ち寄って、そこからどんなことが読み取れるか話し合ってみよう。

▼どのようにして生まれたものかを考えてみましょう。

▼だれがだれに向けてどのようなメッセージを送っているのかを考えてみましょう。

▼どのような表現の工夫、戦略があるかを考えてみましょう。

▼文章の後ろにかくれていることを考えてみましょう。

▼他の書き方ができないかを考えてみましょう。

〈メディアの例〉

・小学生新聞の記事

・インターネット上の記事

・雑しの記事

・広告

・ダイレクトメール

・学校で発行されるお知らせ

・ブログ

など

第5章では中学校の教材を検討し、その改編を試みた。

小学校と同じく東京書籍版の「読み比べ」教材を対象とし、第1学年から第3学年までのすべての教材を国語科CRのフレームワークの観点から分析し、その結果をもとに手引きの改編を行った。

中学校教材については、国語科CRのフレームワークの観点から手引きの調査を行った。結果は全26設問のうち、「レトリック」の要素があるものが2問、「定義／構成」の要素があるものが1問あるのみで、小学校教材と同じように国語科CRの「5つのねらい」のフレームワークに該当する手引きは少なかった。

改編では、小学校と同じく国語科CRのフレームワークの要素を満たすような改編を行った。改編した教材は中学校、高等学校に依頼して調査を行い、学習者の解答したワークシートと担当教諭のコメントをもとに再修正し、「国語科CRによる教材・学習の手引きの改編—中学校」としてまとめた。

改編案は学習者にとって難しい課題と映ったことが調査から窺えたが、授業形式で担当教諭が支援をしながら実施したクラスでは積極性や質的な向上が見られ、小学校同様、授業として実施をすれば相応の成果が得られる可能性を確認できた。

改編した手引きの一例を次に示す【表 7】。

【表 7】 改編した手引き（「黄金の扇風機」「サハラ砂漠の茶会」第 3 学年）

| 【理解する】 | |
|---|---|
| ①二つの文章はそれぞれ「美」をどういうものだと捉えているか、まとめてみよう。 | E |
| ②「①」の見方・考え方は、文章のどのような書き方に表れているか、まとめてみよう。
②-1 言葉の使い方に着目しよう。
②-2 構成やレトリックに着目しよう。 | B |
| 【推論する】 | |
| ③二つの文章は、どのような読み手を想定し何を目的として書かれたものか考えてみよう。 | D |
| ④二つの文章についてそれぞれ次のことを考えてみよう。
○黄金の扇風機
・筆者の論からすれば、「美しさを見出す」ことの出来ない人はどのような人と言うことができるか、考えてみよう。
○サハラ砂漠の茶会
・筆者は、美が「人間は皆同じである」ことを教えてくれると言うが、それはどのような前提から成り立っているか、考えてみよう。 | |
| 【評価する】 | |
| ⑤「平和な世界を創る」という題目で意見文を書くことになった。意見を支える根拠として引用する場合、あなたはどちらの文章を選択するか、またそれはなぜか。考えをまとめ、話し合ってみよう。
⑤-1 自分が創りたい平和な世界とは何かを定義しよう。
⑤-2 活かせる要素を文章から抽出し、関連づけよう。 | C |

*右列の A～E は【表 3】の A～E に対応している

第 6 章では高等学校の教材を検討し、その改編を試みた。

高等学校の調査は、国語科教諭の研修会の機会を利用し、教材改編の可能性を探った。

東京書籍版の高等学校「国語総合」の評論・随想教材の手引では、「理解する」に該当する設問が 71%、「推論する」に該当する設問が 1%、「評価する」に該当する設問が 28%であった。また、「5 つのねらい」の要素がある設問は全 83 設問中 6 設問にとどまった。

以上の分析から「推論する」こと、「5つのねらい」のフレームワークをなるべく均等に配置することを目標に改編案を作成した。改編案は研修会で取り組んでもらい、その可能性について検討をした。

参加者からはわかりにくいという反応が一部あったものの、既存の手引きへの不満を解消する要素があるとの評価も多く、既存の手引きの改善に寄与しうることが確認できた。

これらの検討から改編案を修正し、「国語科 CR による教材・学習の手引き改編—高等学校」としてまとめた。

改編した手引きの一例を次に示す【表 8】。

【表 8】 改編した手引き（「暇と退屈の倫理学」第 1 から第 2 学年）

| | |
|--|---|
| 【理解する】 | |
| ①筆者が問題だとする「暇と退屈」の処し方とはどのような処し方か。 | E |
| ②筆者はウィリアム・モリスのどのような点を評価しているか。 | B |
| 【推論する】 | |
| ③筆者は「資本主義」「社会主義」をどのようなものだと評価しているか。 | A |
| ④この文章はどのような読者に何を目的として書かれたものと考えられるか。 | D |
| 【評価する】 | |
| ⑤社会における筆者が問題とする「暇と退屈」の処し方の具体的事例を挙げ、なぜそれが問題なのか説明してみよう。 | A |
| ⑥次の詩（本文省略、出典は『夏の墓』）は「パンの話」（吉原幸子）である。この詩の「バラ」とこの文章における「バラ」の関連性について話し合ってみよう。 | C |

*右列の A～E は【表 3】の A～E に対応している

小学校、中学校、高等学校の調査からは、既存の国語科教科書にはクリティカル・リテラシーの視点はなく、読むことを社会的実践とするには一定の見直しが必要であると思われた。一方、学習者の解答から、国語科 CR の指導理論は、問い方や授業方法に配慮すれば十分学校現場に受け入れられる可能性があることが示唆された。

5. 新しい教育状況における国語科 CR の可能性と展望（目的⑤）

第 7 章では、国語科 CR の指導理論を、新しい教育状況の中でどのように活かせるかを、新学習指導要領の方向性や官民あわせたさまざまなテスト、問題集の分析から考察した。

調査は、新学習指導要領の「思考力・判断力・表現力」の概念や「主体的・対話的で深い学び」の提言、全国学力テストの B 問題、大学入学共通テストのモデル問題などの官製テスト、および活用型の学力に照準を合わせた民間によるテストや、その育成を企図した問題集などを対象に行った。テスト、問題集の調査は、第 4 章、第 5 章、第 6 章で行った調査と同様に、国語科 CR の読解プロセスとフレームワークの観点から設問を類別し、その

傾向を量的、質的に分析し考察した。

その結果、全国学力テストの B 問題は、読解プロセスでは教科書の手引きの分析と同様、「推論する」に該当する設問の割合が低かった（小学校／「理解する」62%、「推論する」19%、「評価する」32%、中学校／「理解する」65%、「推論する」3%、「評価する」32%）。また、フレームワークでは「レトリック」と「想定読者」に該当するものが若干見られる程度であった（小学校／「レトリック」17%、「想定読者」10%、中学校／「レトリック」22%、「想定読者」9%、「定義／構成」4%、「トピック」1%）。この傾向は 2017 年に公開された大学入学共通テストのモデル問題でもほぼ同じであった。

この問題の解決としては、例えば日本生涯学習総合研究所（2016,2017）がテストづくり理論の中で示した別案がある。このテストづくり理論は、国語科 CR の読解プロセスと共通する概念を持つものであり、国語科 CR の指導理論がその解決に寄与する可能性が示唆された。

これらのテストは、積極的に図や表、会話などを取り入れたマルチテキストを用いていることで共通していたが、その一方、「総合学力調査」『現代文 NEW アプローチ』などでは、従来国語科が扱ってきた説明的文章や評論文などの文字テキストを素材としながら、国語科 CR が求めている読解プロセスやフレームワークの要素を満たす問題設計がなされていた。このことは、素材が従来のような文字テキストであっても、国語科 CR の理論を援用すれば十分新しい教育状況に適応できることを示すものであると言える。

6. 研究の課題

本研究では、国語科 CR の指導理論を構築し、新しい教育状況におけるその可能性を見出すことができた。

しかしながら、解決されていないいくつかの問題が課題として残った。

一つ目は実証的な研究を取り入れる課題である。調査は実施したものの、本研究では時間をかけた授業実践による検証はできておらず、その実効性についてはまだまだ予測の段階でしかない。したがって、今後は実証的な研究を行うことによってその可能性をさらに立証していく必要がある。

二つ目は、国語科 CR を体系的に具現化する課題である。本研究では、国語科 CR の指導理論の検討は、既存の教科書教材等で実施してきた。しかし本来的に国語科 CR の指導理論による完全な実践を構築するには、教材の選定の段階から国語科 CR の指導理論を体現する教材づくりを目指し、教材、手引き、指導書、テストという総合的な教材を開発することが必要になる。

三つ目は、「書くこと」「話すこと・聞くこと」への研究を拡張する課題である。本研究では基本的に「読むこと」を想定した提案しかできていない。しかし、新しい指導理論として国語科 CR を総合的に提案するには、「読むこと」にとどまらず、「書くこと」「話すこと・聞くこと」に関する研究が求められる。

以上 3 点が国語科 CR 研究として今後の解決すべき主な課題である。

7. 今後の展望

本研究では国語科 CR の指導理論を構築し、新しい指導理論の新しい教育状況のなかでの可能性について考察してきた。十分な実証研究や、読むこと以外の研究への拡張はこれからの課題とはいえ、国語科として読むことを社会的実践としていく方略を示すことができた。

では、国語科 CR は具体的に今後どのような場面でどのように活かすことが可能なのか。

国語科 CR の指導理論は、国語科という教科がこれまであまり着目してこなかった社会参画を意識し、その方略を示すものであった。このことは、知識基盤社会において、国語科を「社会を取り入れ社会へ返す」という意味での重要な教科として社会に再認識させることを実現させるものである。国語科を国語科という閉じられた世界から解放し、社会参画に必須な教科だという認識を社会から得るプロジェクトである。

このことについては、新学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」における「見方・考え方」を鍛えるには「国語科を要としつつ」取り組むべきであるとしていることにも同様のねらいが感じられる。テキストの情報をインプットし、咀嚼し、そしてアウトプットしていく過程、つまり「社会を取り入れ社会へ返す」ことの役割を果たす中心教科は、ことばを扱う国語科なのである。

さまざまな言説が飛び交い情報の洪水にさらされているこのような時代だからこそ、あえてことばに立ち止まり、そのことばから社会を読み解き、そして社会へと自分のことばを返していく。このような学びを実現する一助として国語科 CR の指導理論をさらに研究し発展させていきたいと考える。

参考引用文献

- 青山之典 (2013a) 「Common Core State Standards for English Language Arts における Reading Standards for Informational Text (K・12) —スパイラル構造をもった説明的文章読解カリキュラムの実際」国語教育思想研究, 第7号
- 青山之典(2013b)「説明的文章読解カリキュラムにおける Strand の構成に関する一考察 — Strand 相互の関係性に着目して」全国大学国語教育学会発表要旨集, 第124号
- 浅貝祥輝 (2011) 「『新聞の投書を読み比べよう』(東京書籍・6年上)の授業プラン〈新教材について〉」『国語科授業論叢』第3号
- 朝日新聞×ベネッセ (2017) 「ことばを、チカラに。語彙・読解力検定」H.P.
<http://www.goi-dokkai.jp> (2017.11.2.確認)
- 阿部昇 (1996) 『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判』明治図書
- 阿里山森林鉄道 (2017) 「ループ型路線と螺旋型路線：建築方法」
<https://www.railway.gov.tw/Alishan-jp/CP.aspx?sn=18125&n=20744> (2017.11.11 確認)
- 有元秀文 (2008) 『必ず「PISA 型読解力」が育つ七つの授業改革—「読解表現力」と「クリティカル・リーディング」を育てる方法』明治図書
- 有元秀文 (2010) 『「PISA 型読解力」の弱点を克服する「ブッククラブ」入門』明治図書
- 犬塚美輪 (2013) 「読解方略の指導」『教育心理学年報』Vol.52
- 井上尚美 (2007) 『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理〈増補新版〉』明治図書
- 井上尚美・中村敦夫 (2001) 『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書
- 井上尚美編集代表、芳野菊子編 (2003) 『国語科メディア教育への挑戦—第4巻 中学・高校編』明治図書
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』岩波書店
- 岩崎豪人 (2002) 「クリティカル・シンキングのめざすもの」『Prospectus』第5号
- 上杉嘉見 (2008) 『カナダのメディア・リテラシー教育』明石書店
- 上田祐二 (2010) 「批判的に読むことの授業づくりの視座—説明的文章指導における批判の基準の検討を通して」『旭川国文』第21, 22 合併号
- 上松恵理子 (2007) 「読むことにおけるリテラシー概念の変遷—新たなリテラシー論の構築に向けて」『人文科教育研究』第34集
- ヴォダック・ルート/マイヤー・ミヒャエル/〈野呂香代子監訳〉 (2010) 『批判的談話分

- 析入門』三元社
- 大河内祐子 (2004) 「批判的読みにおける文章の構造的側面の役割」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 43 号
- 大出敦 (2015) 『クリティカル・リーディング入門—人文系のための読書レッスン』慶應義塾大学出版会
- 奥泉香 (2010) 「映像テキストの学習を国語科で行うための基礎理論の整理—選択体系機能文法を援用した試み」『国語科教育』第 68 集
- 奥泉香 (2012) 「視覚化する書記テキストの学習—批判的談話分析とデザイン概念を援用して」『国語科教育』第 72 集
- 奥田純子 (監修) (2013) 『読む力—中上級』くろしお出版
- 恩沢幸代 (2008) 「高校英語におけるクリティカル・リーディングの実践研究—キャサリン・ウォレスの理論を手がかりとして」東京大学大学院教育学研究科, 修士論文
- 河野順子 (2006) 『〈対話〉による説明的文章の学習指導—メタ認知の内面化の理論提案を中心に』風間書房
- 基礎学力総合研究所/Z 会 (2017) 「日本語運用能力テスト」H.P.
<https://www.21lri.co.jp/japanese/> (2017.11.02.確認)
- 北川達夫・中川一史・中橋雄 (2016) 『フィンランドの教育—教育システム・教師・学校・授業・メディア教育から読み解く』フォーラム A
- 吉川芳則 (2017) 『論理的思考を育てる！批判的読み (クリティカル・リーディング) の授業づくり』明治図書
- 桑原隆編 (2008) 『新しい時代のリテラシー教育』東洋館出版社
- 楠見孝・子安増生・道田泰司編 (2011) 『批判的思考力を育む—学力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣
- 楠見 孝・道田泰司 (2015) 『批判的思考—21 世紀を生き抜くリテラシーの基盤—』新曜社
- 黒上晴夫 (2016) 「パフォーマンス評価としてのルーブリック」
<http://ks-lab.net/161105ajg.pdf> (2017.9.27 確認)
- 黒川悠輔 (2011) 「Critical Language Awareness の目的と課題」『早稲田教育学研究』第 3 号
- 黒川悠輔 (2013) 「国際理解教育における批判的言語意識 (Critical Language Awareness) の意義」『国際理解教育』第 19 号, 明石書店
- 黒川悠輔 (2014a) 「ことばの権力性批判としてのクリティカル・リーディング—C.ウォレスによる教育的アプローチの位置づけをめぐって」『早稲田教育学研究』第 6 号
- 黒川悠輔 (2014b) 「言葉をめぐる問題への教育的アプローチ—批判的言語意識の理論と実践に学ぶ」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要: 第 1 分冊、哲学 東洋哲学 心理学 社会学』第 59 号

- 経済協力開発機構（OECD）編著〈国立教育政策研究所 監訳〉『PISA の問題できるかな？—OECD 生徒の学習到達度調査』明石書店
- 光野公司郎（2005）「論理的な文章における効果的な構成指導の方向性—論証の構造を基本とした新しい文章構成の在り方」『国語科教育』第 57 集
- 香西秀信（1995）『反論の技術—その意義と訓練方法』明治図書
- 国立教育政策研究所 編（2013）『生きるための知識と技能 5—OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2012 年調査国際結果報告書』明石書店
- 小柳正司（2010）『リテラシーの地平—読み書き能力の教育哲学』大学教育出版
- 小柳和喜雄（2003）「批判的思考と批判的教育学の『批判』概念の検討」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第 12 号
- 小柳和喜雄（2005）「メディア・ディスコースの分析方法に関する予備的研究—Norman Fairclough のクリティカル・ディスコース分析を中心に」『教育実践センター研究紀要』第 14 号
- 小柳和喜雄（2012）「第 2 章「メディア」を対象とした教材開発・カリキュラム開発 第 1 節 国語科教育と学校外での子どもの言葉の利用・メディア接触を考える—教材・カリキュラム開発に向けて」『国語科教育』第 72 集
- 酒井雅子（2017）『クリティカル・シンキング教育—探究型の思考力と態度を育む』早稲田大学出版部
- 佐藤卓己（2014）『大衆宣伝の神話—マルクスからヒトラーへのメディア史』筑摩書房
- 里見実（2010）『パウロ・フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』太田次郎社エディタス
- 澤口哲弥（2012）「高等学校国語科における評論文教材のクリティカル・リーディングに関する実践的研究」三重大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育専修，修士論文
- 澤口哲弥（2013a）「高等学校における評論文のクリティカル・リーディング—思考の過程を可視化する学習指導」『国語科教育』第 74 集
- 澤口哲弥（2013b）「クリティカル・リーディングとその評価に関する実践的研究—評論文指導におけるテストの開発と実際」全国大学国語教育学会発表要旨集，第 125 号
- 澤口哲弥（2014）「問いを立てる力を育むクリティカル・リーディング—高等学校における評論文指導」全国大学国語教育学会発表要旨集，第 126 号
- 澤口哲弥（2015）「国語科におけるクリティカル・リーディングについての考察—C.Wallace の理論を中心に」広島大学大学院教育学研究科紀要，第一部，第 64 号
- 澤口哲弥（2016a）「国語科における『クリティカルな読み』の指導理論に関わる—考察」『国語教育思想研究』第 12 号
- 澤口哲弥（2016b）「C.Wallace“Critical Reading”理論の研究」広島大学大学院教育学研究科紀要，第一部，第 65 号
- 澤口哲弥（2017a）「小学校における国語科クリティカル・リーディングの可能性—東京書籍版「くらべる」教材の分析から」第 1 回初等教育カリキュラム学会，発表資料

- 澤口哲弥 (2017b) 「国語科クリティカル・リーディング指導の研究 (3) —中学校教材における「読み比べ」教材の検討」第 132 回全国大学国語教育学会, 発表資料
- 澤口哲弥 (2017c) 「国語科クリティカル・リーディング指導の実践的研究—C.Wallace "Critical Reading"理論を手がかりに」『国語教育思想研究』第 14 号
- 澤口哲弥 (2017d) 「『滞空時間の長い問い』で思考を深める古典学習—質の高い対話は質の高い問いから」『教育科学 国語教育』No.809, 明治図書
- 三省堂 (2016) 『高等学校 国語総合 現代文編 (改訂版)』『精選国語総合 (改訂版)』
- 児童言語研究会・中学部会 (2006) 『中学生と学ぶメディア・リテラシー—メディア社会を生きる力を育てる』—光社
- 篠崎祐介 (2012) 「『コミュニケーション的行為の理論』を援用した評論教材の研究—『水の東西』を例に」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部, 第 61 号
- 篠崎祐介 (2014) 「社会形成に資する読むことの教育に関する考察」『国語科教育思想研究』第 8 号
- 篠崎祐介 (2014) 「森田信義の説明的文章指導論の変遷」『国語科教育思想研究』第 9 号
- 島津真由子 (2012) 「小学校第 4 学年 国語科学習指導案—目的による表し方のちがいを考えよう」
- http://www.saga-ed.jp/tanken/kouza_jirei/h25/es/syoukoku1/24syoukokusidouann.pdf
(2016.11.24 確認)
- 尚文出版編集部編 (2017) 『現代文ウィニングクリア 2』尚文出版
- 尚文出版編集部編 (2017) 『現代文 NEW アプローチ (スタディ 1)』『現代文 NEW アプローチ (スタディ 2)』尚文出版
- 白井恭弘 (2013) 『ことばの力学—応用言語学への招待』岩波書店
- 菅谷明子 (2000) 『メディア・リテラシー—世界の現場から』岩波書店
- 杉野幹人・内藤純 (2009) 『コンテクスト思考—論理を超える問題解決の技術』東洋経済出版社
- 杉原めぐみ (2011) 「既習事項を活用した説明的文章の指導—小学 2 年国語科 「ちがいはっけん!! めざせ! くらべ名人 『ふろしきはどんなぬの』」の実践を通して」
- http://www.apec.aichi-c.ed.jp/shoko/101syuu/101katsuyou/kokugo_syou1.pdf
(2016.11.23 確認)
- スコウラップ・ローレンス/コールドウェル・リチャード・T.(1991)『From Text to Context』くろしお出版
- 鈴木貴美子 (2006) 「日本語教育における『日本文化』についての理論的・実践的考察—クリティカルペダゴジーの視点から」『ICU 日本語教育研究』第 3 号
- 鈴木みどり (1997) 『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
- 鈴木みどり (2001) 『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社
- Z 会 (2017) 「国語力検定」H.P.

- <http://www.zkai.co.jp/kentei/kokugo/> (2017.11.02 確認)
第一学習社編 (2017) 『論理力ワークシート』 第一学習社
高泉範行 (2013) 「第 3 学年 国語科学習指導案—書き手の表現の意図による事柄の取り上げ方や、説明の仕方の工夫を読み取る」
<http://www.sendai-c.ed.jp/matumori/H21/kenkyu/H25/sidoan3-1.pdf>
(2016.11.23 確認)
竹川慎哉 (2010) 『批判的リテラシーの教育—オーストラリア・アメリカにおける現実と課題』 明石書店
館岡洋子編 (2015) 『協働で学ぶクリティカル・リーディング』 ひつじ書房
龍城正明 (2006) 『ことばは生きている—選択体系機能言語学序説』 くろしお出版
田中孝一・西辻正副・富山哲也 (2007) 『中学校・高等学校 PISA 型「読解力」—考え方と実践』 明治書院
塚田泰彦 (2003) 「リテラシー教育における言語批評意識の形成」 『教育學研究』 第 4 号
東京書籍 (2012) 『新しい国語』 小学校版 (平成23年度～)・中学校版 (平成24年度～)の「読み比べ (読むこと・説明文系統)」 学習材一覧
https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu24/subject/kokugo/content/kokugo_file11.pdf
(2016.12.2確認)
東京書籍 (2015) 『新編 新しい国語 1～3 (平成 27 年版)』 教科書および教師用指導書 指導編
東京書籍 (2016) 『国語総合 現代文編』 『精選国語総合』
東京都教職員組合荒川支部教研会議国語部会 (1963) 『批判読み』 明治図書
徳井厚子 (2005) 「言語意識を問い直す—Critical Language Awareness の実践」 『信州大学教育学部紀要』 第 115 号
独立行政法人大学入試センター (2017a) 「『大学入学共通テスト (仮称)』 記述式問題のモデル問題例」
<http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00009385.pdf&n> (2017.5.17 確認)
独立行政法人大学入試センター (2017b) 「『大学入学共通テスト (仮称)』 選択式問題のモデル問題例」
<http://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00009923.pdf&n> (2017.7.13 確認)
ドミニク・S・ライチェン/ローラ・H・サルガニク 編著 (立田慶裕 監訳) (2006) 『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』 明石書店
中岡成文 (1996) 『ハーバーマス—コミュニケーション行為』 講談社
永田麻詠 (2011) 「エンパワメントとしての読解力に関する考察—キー・コンピテンシーの概念を手がかりに」 『国語科教育』 第 70 集
中西一彦 (2012) 「教科書新聞教材活用のための必要事項の一考察」 『関西国際大学研究紀要』 第 13 号

- 中村敦雄（2008）「読解リテラシーの現代的位相—PISA2000/2003/2006 の理論的根拠に関する一考察」『国語科教育』第 64 集
- 中村純子（2010）「母語教育カリキュラムにおけるメディア・リテラシー導入の方略—イギリス、オンタリオ州、西オーストラリア州のカリキュラム比較」『国語科教育』第 67 集
- 中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房
- 難波博孝（2008）『母語教育という思想—国語科解体／再構築に向けて』世界思想社
- 難波博孝（2009）「論理/論証/教育の思想（1）—「論理」と「論証」の定義および国語科との関連」『国語教育思想研究』第 1 号
- 難波博孝（2014）「日常の論理」の教育のための準備—論証/説明/感化の論理の区別とその内実」『初等教育カリキュラム研究（2）』
- 西山恵美（2011）「小学校第 6 学年 国語科学習指導案—書き手のくふうを考えながら新聞の投書を読もう」
http://www.saga-ed.jp/tanken/kouza_jirei/h23/es/23syokokugo.pdf
 （2016.11.23 確認）
- 日本生涯学習総合研究所 編（2016）『これからの時代に求められる資質・能力をふまえたテストづくり—大学入試篇・国語』日本生涯学習総合研究所
- 日本生涯学習総合研究所 編（2017）『これからの時代に求められる資質・能力をふまえたテストづくり—高校入試篇・国語』日本生涯学習総合研究所
- 日本新聞協会編（2013）『学習指導要領に沿って 新聞活用の工夫 提案—NIE ガイドブック 高等学校編』日本新聞協会
- ハーバーマス・ユルゲン（河上倫逸他訳）（1981）『コミュニケーション的行為の理論』上・中・下巻、未来社
- バッキンガム・デビッド（鈴木みどり訳）（2006）『メディア・リテラシー教育—学びと現代文化』世界思想社
- 羽田潤（2015）「メディアを活用した国語科教育の研究—単元『スターティング・ポイント』（"Doing Ads"、EMC、2008）の考察を中心に」『国語教育研究』第 56 号
- 浜本純逸監修、奥泉香編（2015）『ことばの授業づくりハンドブック メディア・リテラシーの教育—理論と実践の歩み』溪水社
- 林恭弘（2015）「第 5 学年 国語科学習指導案—新聞記事のひみつを探り、新聞記事の編集者になろう—」
<http://www.kochinet.ed.jp/gudo-e/h27kounaikenn/H27sidouan/612sidouan.pdf>
 （2016.11.25 確認）
- ハリデーM.A.K./ハッサン R.（筧 壽雄訳）（1991）『機能文法のすすめ』大修館書店

- 樋口とみ子 (2010) 「リテラシー概念の展開—機能的リテラシーと批判的リテラシー」『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』松下佳代編著、第 2 章、ミネルヴァ書房
- 樋口英夫 (2008) 「英国の移民問題—『過去』と『現在』」独立行政法人労働政策研究・研修機構 HP.
<http://www.jil.go.jp/column/bn/colum098.html> (2015.9.5 確認)
- 平柳行雄 (2001) 「ディベート指導のための多值的考え方」『大阪女学院大学・短期大学紀要』No.31
- フィンリースン・ジェームズ・ゴードン (村岡晋一訳) (2007) 『ハーバーマス』岩波書店
- フェアクロー・ノーマン (貫井孝典 監修) (2008) 『言語とパワー』大阪教育図書出版
- 福澤一吉 (2012) 『文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング』NHK 出版
- 福田浩子(2007)「複言語主義における言語意識教育—イギリスの言語意識運動の新たな可能性」『異文化コミュニケーション研究』第 19 号
- 藤井聡 編 (2015) 『ブラック・デモクラシー—民主主義の罠』晶文社
- 舟橋秀晃 (2009) 「「論理的」に理解し表現する力を伸ばす指導のあり方—本校「情報科」での実践をふまえて考える、国語科で必要な指導法と教材」『国語科教育』第 66 集
- フレイレ・パウロ (小沢有作ほか訳) (1979) 『被抑圧者の教育学』亜紀書房
- ベネッセコーポレーション (2015～2017) 「中学・高校総合学力調査」各問題
- ホップス・ルネ (森本洋介ほか訳) (2015) 『デジタル時代のメディア・リテラシー教育—中高生の日常のメディアと授業の融合』東京学芸大学出版会
- 間瀬茂夫 (2011) 「説明的文章の論証理解における推論—協同的な過程における仮説的推論を中心に」『国語科教育』第 70 集
- 間瀬茂夫 (2017) 『説明的文章の読みの学力形成論』溪水社
- 松下佳代 編著 (2010) 『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房
- 松下佳代 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房
- 松山雅子 (2005) 「自己認識としてのメディア・リテラシー—文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発」教育出版
- マスターマン・レン (宮崎寿子訳) (2010) 『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社
- 三重県教育文化研究所 (2015) 「探究型の読みを『協働』でめざす小中高カリキュラム」『所報教育三重 臨時号』
- 道田泰司 (2000) 「批判的思考研究からメディアリテラシーへの提言」『コンピュータ&エデュケーション』第 9 号
- 道田泰司 (2013) 「批判的思考教育の展望」『教育心理学年報』第 52 号

- 道田泰司（2015）「近代知としての批判的思考」『批判的思考—21世紀を生き抜くリテラシーの盤』第1部、1-1, 楠見孝・道田泰司編, 新曜社
- 文字・活字文化推進機構編（2011）『改訂版 言語力検定3・4級公式テキスト』日本能率協会マネジメントセンター
- 文字・活字文化推進機構（2009～2014）「言語力検定」各級問題
- 森美智代（2012）「国語科の『話し合い』活動を支える理論の検討—ハーバーマスのコミュニケーション論を中心として」『国語科教育』第72集
- 森田信義（1984）『認識主体を育てる説明的文章の指導』溪水社
- 森田信義（1987）「筆者の工夫の質を問う説明的文章の指導」『国語科教育』第34集
- 森田信義（1988）『説明的文章の研究と実践—達成水準の検討』明治図書
- 森田信義（1989）『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』明治図書
- 森田信義（2011）『「評価読み」による説明的文章の教育』溪水社
- 文部科学省（2005）「OECDにおける『キー・コンピテンシー』について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/002/001.htm
(2017.11.2 確認)
- 文部科学省（2006a）『読解力向上に関する指導資料—PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向』東洋館出版社
- 文部科学省（2006b）『中学校学習指導要領解説—国語編』東洋館出版社
- 文部科学省（2008a）「小学校学習指導要領」
- 文部科学省（2008b）「中学校学習指導要領」
- 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領」
- 文部科学省（2015）「教育課程企画特別部会 論点整理」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm
(2016. 8.19 確認)
- 文部科学省（2016a）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
(2017.1.6 確認)
- 文部科学省（2016b）「学習評価に関する資料」
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1366444_6_2.pdf (2017.9.27 確認)
- 文部科学省（2016c）「総則、評価特別部会資料」
- 文部科学省（2017a）「次期学習指導要領等の改訂案 [小学校・中学校]」
http://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2017/20170214.htm (2017.2.15 確認)
- 文部科学省（2017b）「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716

_1.pdf (2017.11.2 確認)
 文部科学省 (2017c) 「学習指導要領 (平成 29 年 3 月告示)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm (2017.4.1.確認)
 文部科学省 (2017d) 「小学校学習指導要領解説 国語編」
http://www.mext.go.jp/component/a.../12/.../1231931_02.pdf (2017.7.1.確認)
 文部科学省 (2017e) 「中学校学習指導要領解説 国語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/.../1387018_2.pdf (2017.7.1.確認)
 文部科学省 (2017f) 「全国学力・学習状況調査、調査問題調査結果」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/.../1387018_2.pdf (2017.10.2.確認)
 ライチェン・ドミニク・S/サルガニク・ローラ・H 編著、立田慶裕監訳 (2006) 『キー・コンピテンシー—国際標準の学力を目指して』明石書店
 ルブール・オリヴィエ (2012) 〈佐野泰雄訳〉『レトリック』白水社
 渡辺弥生 (2011) 『子どもの「10歳の壁」とは何か?—乗り越えるための発達心理学』
 光文社

Burmeister, Lou E.(1978)*Reading Strategies for Middle and Secondary School Teachers*. Addison-Wesley.
 Fairclough,N(1989) *Language and Power*. London and New York:Lonrman.
 Fairclough,N(1992) Introduction. *Critical Language Awareness* (pp.1-29). London and New York : Longman.
 Grellett ,F. (1981)*Developing Reading Skills*.Cambridge University Press.
 Kress ,G.(1985)*Linguistic Process Sociocultural Practice*.Oxford University Press.
 Louisiana Student Standards(2016) *K-12 Student Standards for English Language Arts*. Department of Education. Louisiana Believes.
 Macknish,C.J.(2011)*Understanding Critical Reading in a ESL Class in Singapore*. TESOL Journal.
 Spears,D(2013)*Developing Critical Reading Skills* McGraw Hills.
 Wallace,C.(1992a) *Reading*. Oxford : Oxford University Press.
 Wallace,C.(1992b) Critical literacy awareness in the EFL classroom. In: Fairclough, N. (ed.), *Critical Language Awareness* . London : Longman.
 Wallace,C.(1999) Critical Language Awareness: Key Principles for a Course in Critical Reading. *Language Awareness*, 8(2).
 Wallace,C.(2001) Critical literacy in the second language classroom: Power and Control. In: Comber, B., & Simpson, A. (Eds.) *Negotiating critical literacies in classrooms* . Mahwah, NJ: London.
 Wallace, C. (2002) Local literacies and global literacy. In: Block, D. & Cameron, D.

(Eds.) *Globalization and language teaching* (pp. 101-114). London ; New York :
Routledge.

Wallace,C.(2003) *Critical Reading in Language Education*. New York : Palgrave
Macmillan.

Wallace,C.(2012) Principles and Practices for Teaching English as an International
Language: Teaching Critical Reading. In: Alsagoff, L., McKay, S. L., Hu, G., &
Renandya, W. A. (eds.) *Principles and Practices for Teaching English as an
International Language* . New York and London : Routledge.